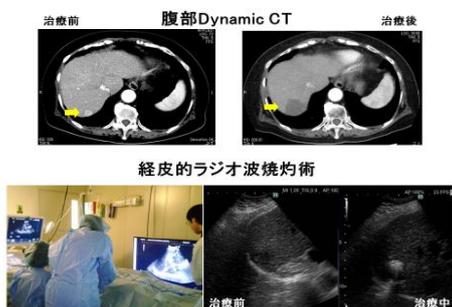


『C型肝炎に対する抗ウイルス治療著効後の肝細胞癌の一例』

仲島クリニック 院長 仲島 信也
肝胆膵内科 講師 打田 佐和子

症例は77歳、女性。C型肝炎にて仲島クリニックに通院されていた。76歳時には、C型肝炎ウイルス(HCV)に対してレジパスビル/ソホスビル配合錠による抗ウイルス治療を受け、ウイルス排除(SVR)が得られた。その後も経過観察されていたが、AFP上昇、肝腫瘍出現を認めたため、精査加療目的に当科へ紹介となった。腹部ダイナミックCTおよび腹部超音波検査にて肝S7に14×12mm大の肝腫瘍を認めた。同部に対して経皮的肝生検を行ったところ、高分化型肝細胞癌の診断となったため、人工腹水下経皮的ラジオ波焼灼術による治療を行った。治療後のCTでは明らかな残存・再発はなく、現在も仲島クリニックおよび当科にて定期フォロー中である。

C型肝炎に対する治療は近年非常に進歩しており、直接作用型抗ウイルス薬(DAA)治療により、肝発癌高危険である高齢、肝線維化進展例(ただし、代償期肝硬変まで)においても高率にSVRが得られるようになった。しかしながら、DAAによるSVR効果が発癌制御にどこまで寄与するかは明らかではなく、SVR獲得後も肝発癌が散見される。すなわち、抗ウイルス治療によりSVRが得られても、定期的な血液検査および画像検査(腹部超音波検査など)での定期的なフォローアップ継続が必要である。



当院におけるDAA治療SVR₁₂率



『早期の当科受診が有益であった、認知機能低下を主訴とした症例』

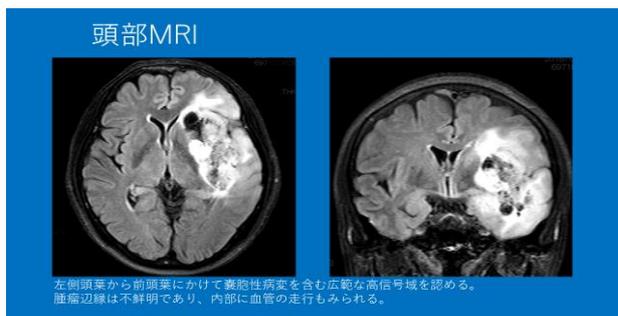
神経精神科 講師 内田健太郎

認知機能障害は高齢者においては、高頻度に見られる状態像である。認知症の原因疾患の大部分はアルツハイマー型認知症などの神経変性疾患や脳血管障害が背景にあり、これらは根本的治療方法が未だ存在しないが、一方で、原因を治療できないいわゆるTreatable Dementiaも存在し、その中には脳腫瘍など、特に速やかな診断と治療を必要とする疾患も含まれ、それらを正確に除外する必要がある。

症例は70歳女性、物忘れや換語困難を主訴に、高血圧で通院中のかかりつけ医より認知症精査目的で当科初診した。初診時に当科で施行した長谷川式簡易認知機能評価スケール(HDS-R)では15/30点と低下が見られたが、一方で公共交通機関を利用した片道1時間の通勤ができるなど日常生活能力は維持されている点が非典型的であった。頭部MRIの結果、左側頭葉に辺縁不整な占拠性病変を認め、脳腫瘍が疑われたため、当院脳神経外科にコンサルトし、同科で手術を施行した。病理診断は退行性乏突起神経膠腫であった。

脳腫瘍は頻度は比較的少ないが、高齢になるほど有病率が増える。一方で、高齢者は頭蓋内圧亢進症状が出現しにくいと、認知機能障害を主訴に物忘れ外来を初診する例も多いと考えられる。

今回は、かかりつけ医から速やかに紹介頂き、当科で鑑別診断後は当院脳神経外科での治療にスムーズな連携が得られたため、結果として可及的速やかな治療につながった症例であり、本会で発表させて頂いた次第である。



次回開催のお知らせ 第39回Face to Faceの会
平成31年3月2日(土) 15:00~17:00 於:あべのハルカス25階 貸し会議室